

先の大戦で祖国日本弥栄の礎として散華された
数百万人の英霊の御冥福をお祈り申し上げます。

峯兵団陣中回顧

山梨県 矢崎 文男

私は大正十一（一九二二）年七月二十日、山梨
県東八代郡中道町下向山に生まれた。

昭和十七（一九四二）年徴集、同年十二月十五
日、東部六十四部隊（千葉県佐倉）に入隊、翌昭
和十八年一月四日、佐倉発、釜山―山海関（鮮満
国境通過）―天津―濟南―徐州―浦口乗船―武昌
鉄道で威寧―蒲圻―長安に下車、独立混成第十七
旅団独立歩兵第九十一大隊（峰六部隊）に配属さ
れ、山砲第一中隊で通信業務に服す。

馬が一三〇頭位おり、厩舎の建設築造のため中
国人の民家を解体し厩舎用材に再使用する。その
解体作業に従事し、長材である梁をロープで引き

倒す折、八人でロープを持ち、私は解体物に対し
て最短部を握り、渾身の力を入れて強引に引いた
ので、梁は確保されたが、そのはずみで長大梁の
先端が足に当たり、骨折負傷す。このために第一
期検閲は不参加となる。

だが隊長は「矢崎は解体に当たり率先して危険
な先端部のロープを握り、全力を尽くして解体作
業に従事しての負傷であるから考慮すべきだ」と
のことでした。

昭和十八年四月、湖南進攻作戦があり、部隊は
岳州へ、私は負傷の傷癒えず残留する。この湖南
作戦は昭和十八年七月五日頃にはほぼ終わり、部隊
は湖南省威寧県馬橋に移駐し、砲兵部隊の警備に
当たる。

たまたま部隊で木炭の需要があり、炭焼き経験
者を求められたので名乗りをあげ、支那人を使
い、早速木炭窯を作り、周辺の松材で製炭したと
ころ出来栄えが見事で農村出身者が重宝がられ

る。

余談であるが、部隊長等が焼肉、焼き魚（長江の恵みでいたるところに河川があり魚に不自由なし）に使って好評を博した。

寒村出身は軍隊ではなかなか役に立つ。そして馬にも馴れているし、農作業で労働しているのので何事にもへこたれない。交通機関を利用すること少なくて歩くから行軍にも強い。粗食で素朴だから軍隊の食は美味で、上官の言には素直に従い批判、口答えはしない。作物は正直で、よく手入れすれば良くできる。

手抜きすれば良い作物はできない。だから真面目にやる者に良い作物が採れる。従って真面目にする者だけが勝つのであるから農業は真面目人間を作る。軍隊は上官の命令を素直に聞き、それを実行する人間が軍隊向きである。田舎の山猿部隊が行軍に強く、堅忍持久力ある農村出の部隊が戦闘にも強い。

都市出身者の部隊は軟弱で、すぐへこたれてし

まう。すぐ「あかん」と弱音を吐く。要領ばかりで中身なく、いろいろあげれば際限ない。結論は軍隊には不向き人間だと思った。

昭和十九年五月頃より、在支米空軍の活動が活発になる。岳陽県呉家にて粵漢線の安全運行を確保するため高台に砲兵陣地を構築する。陣地の直径七メートルで円形の土嚢を積む。頭上に楠の大木あり、根周りは六メートル内外、樹冠は巾二〇メートル位、陣地はその下にあり自然の遮蔽物となる。

敵機は鉄橋爆破に来襲するから低空で線路上を飛ぶ。我が陣地は高台だから線路上の線の延長線にあって、観測、照準、装填、引手の中で私は引手を受け持つ。

米軍P51の搭乗者の顔がありと見える。鉄路上を北進、超低空で新牆河鉄橋に向かう。砲を僅かな角度にして発射すると命中、見事撃墜する。他の砲兵陣地には、我が陣地のような楠の木

の遮蔽物がないので周辺の木の枝や草で偽装するが、これは天日で乾き、一日で変色して用をなさない。その取替えに苦勞した。

また、偽装陣地を作り、廢車に丸太を載せ砲に見せかける。その偽装は毎日欠かせない大変な勞力だった。そんなことから、あるいはこの戦争は勝てるかなと、かすかに心配をした。

先に町から来た兵は兵隊向きでないと申しましたが、昭和二十一年復員以来、五十八年も経って、その間農業一筋の私が、更にその感を強くしたのであって、当時は町場の人は何をさせても百姓出の人にはかなわないと漠然と膚で感じた程度でした。

私の駐屯地は揚子江沿いが多く、河川がいたるところにあり、洞庭湖の水位は二〇メートルの差があつて、水辺に葦が茂り川魚が多い。鯉、雷魚の類が多く、時折、魚取りをする。それには瀬を止め、瀬をまわし、水替えして魚を獲るのである

が、町方出の兵はその方法も知らない。農村出は子供の頃から近所の川で魚取りを体験しているからお手のもので、楽しく面白くてたまらない。また魚果（戦果）も上々で炊事に廻すことが再々あつたが、ここでも町場の兵は見劣りがする訳である。

私の駐屯地は岳陽を入れて、東北の湖北省の武昌、漢口、大治、東南の江西省の九江の間で、三国志の英傑「黃邁」の名を取って命名した黃蓋湖があり、いずれも揚子江に沿っている。当時の揚子江は近時、「長江」と呼称することが多い。日本の稲作は、この地より伝来したとの説もある。また赤壁の戦跡もある。因みに私は三国志に興味があり、三国志に関する書物数冊を愛読する。

また、この地方は気候温暖で山紫水明、物資も豊かである。中でも米の生産は特出している。成程長江の水が豊かであり、無限に水田が広がっている。洞庭湖は、我々が駐屯地の東に位置している。

岳陽の市街はことごとく破壊されて瓦礫と化している。テレビで見るイラク首都バグダッドよりひどいのであるが、今にして思うのは岳陽楼の外は敵然として残っていたことだった。

復員後数十年して分かったことであるが、岳陽は北緯三〇度弱にあり、九〇〇キロの内陸にあるとはいえ緯度的には、奄美諸島の名瀬にあたるから気候温暖は当然で、米も獲れる訳です。

私の軍隊歴（独立混成第十七旅団砲兵隊記録）によると次のようです。

昭和十八年一月四日 入隊

自昭和十八年四月一日 江南殲滅作戦に参加

至昭和十八年六月三十日 作戦終了

昭和十八年七月五日 湖南省咸寧県馬橋進駐

同地区警備、其の間常德作戦に参加

昭和十八年十二月十七日 馬橋付近の戦闘参加

昭和十九年四月十六日 臨湘県長安に移駐
警備中に「ト」号作戦参加

昭和十九年五月十二日 長安において対空戦闘

昭和十九年五月二十二日 臨湘県文家舖付近の戦闘に参加

昭和十九年七月一日 岳陽県呉家に移駐湖東地区警備

昭和十九年八月二十二日 岳陽九竜沖において対空戦闘

昭和二十年二月十四日―四月十九日 一部裏焚作戦参加

昭和二十年十月十三日 臨湘県雲溪に集結

昭和二十一年四月十七日 雲溪出発

昭和二十一年六月二日 上海出発

昭和二十年六月十一日 佐世保上陸

以上は矢崎文男所持の昭和四十八年六月発行「峯兵団陣中回顧録」によるものである。

昭和十九年七月、補充兵の入隊があったが、訓練や軍務が過酷で耐えられず、脱走する事件があった。中隊全員で捜索して身柄を確保した。私も乗馬で捜索に参加し、道路脇の一メートル強の側溝を飛び越えんとしたとき馬の後足が溝に落ち、私は土手に落馬した。その瞬間、馬が立ち上がる時男の急所を蹴られ、出血、失神するという重傷を負った。後日軍医さんが不能者となるどころ超奇跡的に助かったと、九死に一生を得た事故であった。

昭和二十年五月、歩兵砲中隊、機関銃中隊、通信第一小隊は桃林へ移駐し、私は上等兵に進級した。

桃林にくる前、漢口の南の咸寧の南の馬橋に駐屯し、通山を通り崇陽に至り、羊楼洞から新開塘へ、更に桃林へときた。その距離は三〇〇キロを超え、昼夜兼行一週間の行軍であった。

当地には河川が多く、雨で道は泥寧化し、馬は

砲車を輓き、日にほんの数回の大休止のみであった。この大休止の時も兵は馬の水飼いや飼料を与え、蹄鉄と馬の脚部マッサージなどで小便する暇もない有様であった。それに行軍で落伍しても収容しない、そこに置いて行くとの厳命があった。

夜は馬の尻尾につかまっつての半分眠りながらの行軍で、疲労の極限にある。その上軍紀厳正で、中隊長は父と思え、班長は母と思え、階級章は上海で乗船後、佐世保港で上陸する直前にはずす状態で、厳正そのものであった。桃林で終戦、武装解除は岳州で行われた。

洞庭湖の北にある岳州の西北の揚子江左岸の町、監利に移され、中国軍の給与を受けつつおよそ一カ月を過ごした。

昭和二十年十一月、岳州西北三〇キロ位の地、揚子江右岸の道人磯に収容所を建設する。周辺の松の小丸太、径六から八センチの丸太を柱として、揚子江岸に自生する葦で壁及び屋根とし、ま

るで南方現地人の家、同様の家で過ごすこととなった。

また、農作業で農家の手伝いをする。米は獲れるので米飯は充分食することができた。時に道路の修理で土木仕事もさせられたが、私はこれはお手の物、別に苦にならなかった。中国軍給与もまあまあで、北支の方では高粱飯だと聞いたが、当地ではそんな事もなく、食物で困ることもなく幸運であったと今でも考えている。

「峯兵団陣中回顧録」は三三七頁の大著で、昭和三十六年六月発行、昭和四十二年十二月再刊、昭和四十八年六月発行と三度刊行された。

この峯兵団戦友会の団結は強固で、峯兵団自体が旅団長以下将兵の団結と厳正な軍紀を確立し、戦友愛を保持し、真摯に任務遂行に邁進した証左であると信じている。戦後五十八年を経てなお戦友会が継続し、山梨県石和温泉郷のホテル「千石」に会費一万二千円で開催するとの通知に接し、椎間板ヘルニアで整形医にて加療中である

が、是非出席したいと思っている。

これ実に日本帝国軍人の本姿を顕現する一つに外ならないものと思う。

今にして思うことであるが、私が駐留、作戦、戦闘の地域は、粵漢線咸寧（漢口、武昌の南）から岳州の南、新牆、洞庭湖北、揚子江左岸の監利で、気候は前述の通り北緯二九度から三〇度、温暖で長江の水量豊かで一大穀倉地帯であった。

そして果実もまた豊富で、巨大大湖、洞庭湖の東岸である。岳陽を南下すれば省都長沙があり、長沙寄りの地に、史上で有名な楚の貴族にして憂国の義人「屈原」が投身せし「汨羅の地」がある。紀元前二七〇年頃の人である。

離騒の詩の作者、昭和維新の歌の作詞者、五・一五事件の首謀者三上卓、元海軍中尉は、昭和維新の歌詞に汨羅と離騒とを入れ、国家改造と革新を求める多くの青年将校の共感を得て愛唱されるところとなっている。一世を風靡した名曲であっ

た。

昭和維新の歌（一五節あったと思う）

一 汨羅の淵に波騒ぎ

巫山の雲は乱れ飛ぶ

混濁の世に吾立てば

義憤に燃えて血潮湧く

二 止めよ離騒の一悲曲

悲歌慷慨の日は去りて

吾等が劔いまこそは

革正の血に燃ゆるなり

また赤壁があり、中国共産党の首領・毛沢東も

湖南の出身である。

上海への集結は本来、長江を下るのが得策であ

るが船は無く、鉄道で道人磯―岳州―漢口―鄭州

―開封―徐州―南京―上海へ出て乗船する。昭和

二十一年六月十一日、佐世保に上陸帰郷する。

後記 聞き取り担当者（守屋）

平成十六年二月十一日十一時三十分より二十時の八時間に及んで聞き取りしたわけであるが、矢崎氏は健康を害し安静、更に本人耳難聴であった。

矢崎氏は復員後農業に従事し、公職も多く、理財の才ありて財を成し、立派な家を新築している。また田畑も多く米作、果樹栽培も行い、質実剛健、軍隊生活でもあまり古兵とならず、大変人生に益する点多しと語っておられた。

擲^{てき}弾^{だん}兵

愛知県 鈴木和治

私の生家は小作農で両親と姉、私、妹、弟の六人家族でした。当時の高豊村の高根尋常高等小学校の高等科を卒業し、家業の手伝いしながら青年学校を卒業しました。